

社会情報学部創立20周年おめでとうございます(20周年記念特別号)

著者名(日)	花村 邦昭
雑誌名	大妻女子大学紀要. 社会情報系, 社会情報学研究
巻	21
ページ	ii
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00005737/



社会情報学部創立20周年おめでとうございます

大妻学院

理事長 花村邦昭

20周年記念特別号への寄稿を求められたこの機会に、社会情報学は何を学ぶ学問かを改めて原点に遡って考えてみます。

資本主義社会には当然のことながら資本の論理がはたらいています。資本の論理は、駆動原理と制御原理の二つに分けて考えることができます。

駆動原理は一言で云って、利潤動機による資本の自己増殖という原理です。利潤の極大化を求めて資本はどこへでもグローバルに自己展開していきます。資本にもともと国籍はありません。生産拠点や研究開発部門を海外に移したり、本社での公用語を英語にしたりする最近の流れはその一環です。

その資本の自己増殖原理に歯止めを掛けるのが制御原理です。制御原理は大括りすれば資源関連と環境関連に分かれます。資源は無限ではありませんから資本は資源開発、省資源・省エネに力を入れます。しかし、それによる科学技術の進歩がまた駆動原理を刺激して利潤動機に新たな拍車を掛けることとなります。

環境には自然環境、社会環境、文化環境等があります。これを痛めつけ破壊しては資本そのものが存立不能となりますから資本は環境開発、環境修復・保全のための制御原理を自らのうちにビルトインしています。教育をはじめメセナや社会福祉などへの投資がそれです。しかし、最近では制御原理であるはずの環境関連投資がむしろ資本の駆動原理を主動するようになってきています。

制御原理をすら駆動原理に取り込んでいくこの資本の論理の行き過ぎがいまあちこちで問題になっています。両者の間に本来あるべきバランスが崩れて全体が駆動原理へ傾斜し、ために制御原理が十分に機能しなくなっているのです。たとえば、原子力発電事故がそうです。制御原理について十分な理解を欠き、制御装置が不十分なまま駆動原理・駆動装置だけが独走した感があります。あるいは、繰り返し発生する金融危機もそうです。駆動原理だけが暴走してついには得体の知れないペーパー金融商品を作り出してしまったのです。あるいは、いまさまざまな形で問題化している家族・家庭の崩壊現象も考えようによってはその症例の一つです。資本の歪んだ駆動原理が本来なら制御原理として働くはずの人間的・社会的・文化的資源までも食いつぶそうとしているのです。

別に新たな問題も浮上しています。それは人間の身体が体外に装着されたコンピュータ・システムにサポートされて、そこにこれまで見たこともないような「人造」人間、あるいは「人工」社会が創出されようとしていることです。これを人知のさらなる次元的拡張と見て駆動原理へ取り込むのか、あるいはそこに近未来社会の恐ろしさを見て適切な制御原理を新たに案出するのか、慎重な判断と繊細な感性・想像力が求められます。

いずれにせよ、駆動原理と制御原理の間のあるべきバランスについて健全な良識がはたらかなくなったら、資本主義社会ひいては人類社会の未来は暗いものとなりましょう。そういう意味では、いま人類の英知が試されようとしている、少し大袈裟な言い方をすれば、資本主義はいま文明史的転換期を迎えようとしているとも言えます。

では、われわれはそういう事態にどう対処すればよいか、社会情報学の学問的存在意義はそこにあると思います。社会情報学部はこれからますますその重きを増していくに違いありません。本学部のさらなる発展をお祈りいたします。